

一 次の記事を読んで、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

イヌ（もしくはその祖先）は、少なくとも3万年前には人間の近くで暮らしていた。

当時はまだ農耕がはじまっておらず、人類は狩猟^①サイシユの生活をしていて、動物愛玩^{あいがん}はもちろん、家畜^{かちく}という概念^{がいねん}すらなかったころから、すでにイヌは人間のそばにいたことになる。

イヌの祖先がオオカミであることは、疑いのない事実だ。ただし、DNAの解析^{かいせき}などから最近では、従来の説とは異なり、オオカミの群れのなかで特に人に馴れやすい個体群が人間の集団と接するようになったことで、一部のオオカミがイヌへと進化したわけではなく、と考えられるようになってきている。

I 人間がオオカミからイヌを作りあげたのではなく、人間が出あった時点で、イヌはすでに「イヌ」になっていた、すなわちオオカミとは別種へと進化していたというのが有力な説となっている。

そして2002年、サイエンス誌に興味深い論文も掲載された。

論文は、米・ボストンのハーバード大学とドイツのマックスプランク研究所の共同研究によるもので、「オオカミと比較してイヌは、ヒトがはつするシグナルを読みとる能力が高いことが証明されたが、それはヒトに育てられ、^②ヨウシヨウ時よりヒトと暮らしてきたからではなく、進化の過程で身につけた（遺伝子に^③キザまれた）能力である」というのがその内容だった。

イヌが飛び抜けて高い^A社会認知能力をもっていることを、この論文は示している。同時に論文は、その能力は小犬の時代に訓練によって身についたものではなく、生まれもつてのものであることも示唆する。

視線や、目くばせで合図したもののから、相手の意図や見ているものを察する能力は、実は、チンパンジーやオランウータンなどの人類に近い類人猿^{るいじん猿}ももっていない。身近に暮らすイヌだけが飛び抜けた才能を^④ハッキする。いや、そう断言するのも実は正しくない。

II 鳥類の仲間であるカラスや一部のインコ・オウム類が、同様の能力を示すからだ。

カラスは人間が見ているものを目で追うことができる。また、自分の経験と記憶から、人間の次の行動を予測して、それに対処することもできる。都市部でカラスが大繁殖したのは、こういった能力によるものでもある。人間がなかなか彼らを捕まえられない、ということも^Bまたしかり。だが、誰に教わることもなく道具を自作することを覚え、それを「文化」として群れで共有し、上手く作ることができる道具を「マイ道具」として持ち歩くことすら可能な、高度な知性を備えた仲間（カレドニアカラスなど）をもつカラスには、こんなこと

など、たいしたことではないのかもしれない。

カラスの話は余談だが、イヌのこの「シグナルを読みとる能力の高さ」が、数万年前にイヌとオオカミを分ける鍵になったのではないかと考えられている。そして、人間との接点が増え、共同生活をするようになったことで、こうした資質がさらに伸ばされ、不要な資質が弱められることで現在のイヌになったのではないかと、この説を推す研究者は考えている。

とはいえ、性質が少し異なるだけで遺伝子的にはほぼ同一であり、現在にいたるまでイヌとオオカミは交配が可能で、品種改良にあたつてときにオオカミとの交配が行われたことも、よく知られたとおりである。

C イヌは、人間の生活を大きく変えた第一の存在である。

イヌは、もともともつていた性質ゆえに人間とうまく共同生活できるようになった。そして、人間と暮らしていくあいだに、人間の意に沿えるように、^{III}その性質——特性を磨いていった。

だが、その変化を「D」なものと考えてはいけないのかもしれない。1万年を越える共同生活によってイヌが性質を変化させたように、人間の側にも何らかの変化があったと考えるほうが自然であるようにも思えるからだ。アニマルセラピーに関わりの深い医師の何人かも、その著作を通して同様のことを主張している。

イヌやネコ、小鳥や魚などをぼんやり眺めているだけで自律神経が安定し、心拍や血圧が下がったりするほか、おとなしくそばにいてくれる生きた動物の毛皮や^⑤羽毛に触れることでメンタル的にも安定することが、複数の研究によって証明されている。動物と暮らしている場合とそうでない場合とで、心筋梗塞の手術後の生存率が変わってくる（動物がいたほうが格段に健康面により影響を与える）というデータもある。こうした情報は、特にAAT（アニマル・アシステッド・セラピー…動物介在療法）の分野で注目され、すでに治療にも活用されはじめている。

IV なぜ動物たちがそうした効果をはつきするのかは、いまだ説明されていない。現在も研究が進められているテーマのひとつだが、こんなふうには考えられないだろうか。

日中はもちろん、人間が視界を失って無防備になる真夜中も、イヌはそのするどい嗅覚や聴覚、暗視の能力で見張りをしてくれていた。オオカミと同じ血を引くイヌという生き物がそばで守っているため、人間の群れには他の肉食獣が近寄りにくくなった。そうした事実が、人間が安らいだ眠りを得られるようになった背景にはある。イヌが恩恵として与えてくれた安眠である。

守りの礼として食べ物を与えたりしたことで、両者の絆はさらに深まり、安心感や信頼感はさらに強まっていく。
こうした事実や、相互に協力して獲物を狩ることなどを通してイヌは、「動物のなかには、人間に安らぎや平穏をもたらしてくれるものもある」と、深く人間の心にきざみ込んだのではないだろうか。もちろん、これは推測にすぎない。だが、長い時間のなかで、イヌによってもたらされた安心感が人間の遺伝子にきざまれ、動物に対するこうした反応を生じさせるきっかけ（のひとつ）となったと考えられないこともない。

（支倉楨人著『ペットは人間をどう見ているのか』より。一部改変）

〔語注〕

※示唆する……………それとなく知らせること。

※メンタル的……………精神的。

問一 ①サイシュ ②ヨウショウ ③キザまれた ④ハツキ ⑤羽毛 のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 I N にあてはまる言葉としてふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。
ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

ア そして イ つまり ウ さらに エ だが オ というのは

問三 A 社会認知能力 とありますが、これをわかりやすく言うところのどのようなものですか。別の言い方で表している部分を、本文中より二カ所ぬき出して書きなさい。

問四 B またしかり とは「また同様である」という意味です。どのような点が同じだということですか。わかりやすく答えなさい。

問五 C イヌは、人間の生活を大きく変えた第一の存在である。とありますが、人間の生活がどのように変わったのですか。説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア イヌがそばにいることによって、人間の病気が快方にむかうようになった。
イ イヌがそばにいることによって、人間は安心して暮らせるようになった。
ウ イヌがそばにいることによって、人間がいやしを得られるようになった。
エ イヌがそばにいることによって、人間の社会認知能力が高まった。
オ イヌがそばにいることによって、目の見えない人が安全に暮らせるようになった。

問六 「D」にあてはまる言葉としてふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先天的 イ 自主的 ウ 一方的 エ 持続的 オ 合理的

問七 動物たちが、人間の心身に良い影響を与える理由を、筆者はどのように考えているのですか。六十字以内で説明しなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

柏木家の正月は、一年中でもっとも決まり事が多い。日ごろ自分勝手な家族が、なぜか正月だけは、この決まり事のもとに文句もいわずにまどまる。

①元旦の朝は、めつたに使わない日本間に家族全員がそろう。客間でもあるこの日本間は、あかねたちの部屋の二倍以上もある広さだ。床の間だけでも畳二枚分が横につながっている。

暮れにはりかえた障子は、まぶしいくらいに白く光り、新しい年のはじまりにふさわしい雰囲気があちこちに漂っていた。

「あけましておめでとうございます」

みんなが声をあわせた。

床の間のかけじくを背にして、父さんと母さんがならび、その前に、四人姉妹は向きあつてすわっている。六人とも着物をきて、めいめいのお膳の前に正座するのは、年に一度だけ。正月の朝の決まり事だった。

あいさつのあと、父さんが雑煮の椀を手にしたときだった。

あかねの前にすわっている二女のきなりが、いきなり立ちあがった。

「あたし……」

せわしなく足踏みをくりかえす。

五年生のきなりは、生成の地に四季の草花をあしらった古代もようの晴れ着を着ている。生地の色は自然な白で、ちよつと黄色っぽい。母さんの古い着物を仕立て直したものだだった。

切れ長の目をしたきなりのヘアースタイルは、小さいころからずつとおかっぱだ。肩まで切りそろえた髪が、着物にととてもよく似あっている。

足踏みをするたびに、髪がさらさらと肩でゆれていた。

「どうしたの？」

A 母さんの声はちよつとがっている。

「あたし、トイレにいつとくの、わすれてん」

きなりは障子をあけて廊下へでるなり、トイレを目ざしてかけだした。

「また、あいつか。ぶしつけなやつちゃ」

父さんはかなりおなががすいている。いつも七時前に朝食をとっているのに、元旦の今朝は十時なのだから。

父さんは 1 雑煮の椀をもとにもどした。

食べ物を前にして「まで」といわれるジョンの気持ちをだれもがかみしめていた。こんなときには数秒が数分に感じられる。開けたままの障子をしばらく見つめていた父さんが、とうとう声をはりあげた。

「おい、まだなのかあ？」

返事はない。

あかねが着物を気にしながら静かに立ちあがった。

長女のあかねは六年生。彼女が着ている着物は沈んだ赤の茜色。無地の振り袖で、昨夜おそくしつけをとったばかりだった。トイレの前で、

「きなり、みんなまつてるよ」

というあかねに、

「あかねちゃん、こっちこっち」

と、きなりが台所でこたえる。

あかねの目を見つめて、きなりが右手を横にあげた。袖の半分が身ごろからはなれてぶらりとぶらさがっている。

「ヒャー、どないしたん？」

「トイレのドアノブにひっかけてもうた。これでとめてえな」

きなりの手にあつたのはホッチキス。

「うそやる？ 着物にホッチキスやなんて……そらあ、やっぱ、あかんやろ」

「ほんなら、どないすんのよ」

ふたりで考えこんでいるところへ、また父さんのどなり声だ。

「おーい、あかねのてつぼうだま^{*}。そこつもんをつれて、さつさともどつてこーい」
父さんの胃袋はもうべちゃんこになっているのだろう。

きなりが 2 顔をあげた。

「いこ。あかねちゃん。しゃあないわ」

覚悟をきめたきなりのあとを、あかねはおずおずとついていった。

思っていたとおり、袖の破れはすぐに母さんの目にとまった。ふたりが部屋にはいるのと、母さんが立ちあがるのがいっしょだった。げんなりした母さんが、ためいきまじりにきなりの袖を持ちあげる。

「ひどいじゃないの。あんまりよ。糸だけじゃなくて、布まで切れているわ。いったいどうやったらこんなことになるの？」

「ごめんなさい」

きなりがぺこっとおじぎをしたところで、父さんがばーんと手を打った。

「はい、それまで。じゃあもういつぺん最初からいこうか」

「おめでとうございます」

とくりかえされたあと、父さんは雑煮の椀をうれしそうに持ちあげた。いままでずっと静かに待っていたふたりの妹たちも、にわかに顔をほころばせている。

子どもたちは、だれもがすました顔で、ゆつくりと箸をうごかす。晴れ着を気にすればするほど、しとやかになっていくのだ。

母さんの前にいる長女のあかねが、最初に箸をおいた。

「ごちそうさまでした」

祝箸をきちんとそろえたあと、あかねはハンカチでそつと口元をぬぐった。ポニーテールに結びあげた毛先がほほにかかる。

あかねの向かいには二女のきなりだ。右肩からピンクの長じゅばんをのぞかせながら、お尻を右に左にごそごそおちつかない。

「もうあかん、足に感覚がなくなつてしまうた」

いうなり、きなりは箸をもつたまま横に腰をずらすと、ドサツと両足をなげだした。はだけた着物のすそから、ゴボウみたいな足が二

本、つきでている。

となりのるりがあわててのりだし、着物のすそに手をかけた。

三女のるりは三年生。瑠璃色の地に、色とりどりの ② カミフウセンが描かれている着物は、母さんが七歳の祝いに作ってもらった晴れ着をそのまま使っている。紫色をおびた紺色の地色は、口数の少ないるりを、いつそうおとなしく物静かな少女に感じさせた。

るりはきなりの両足を持ちあげて、開いたすそをかきあわせた。その手をきなりがびしゃりとはらう。

「かまわんといて。あんたは人のことを気にしすぎやねん。親切ぶられるの、ほんまのこというて、うつつうしいねん」

るりは目をふせると、無言のまま自分の席にもどった。るりは、姉のきなりとは、なぜかときどき気持ちがすれちがってしまう。だまりこくつたるりの大きな目に、長いまつげが影をおとしている。

ふたりを見ていたあかねが、いずまいを正した。

「きなり、そんな言い方はないやろ。まずは、ありがとう、ちゃうの？」

きなりが首をひねって、あかねのほうをむく。

「あかねちゃんには関係ないやん、なんやの。いつもお姉さんぶって」

あかねもだまりこんでしまった。

あかねの横で、ようちえんに通っているもえぎが、心配そうに姉たちを見あげている。黄緑の若芽を思わせる萌黄色に、真っ赤な蘭の花が大胆に描かれたウールのアンサンブルは、もえぎのお気にいりだ。残りぎれで作った大きなリボンが、頭のとつぺんにのっかっている。

「正月やねんで。けんかなんかしたら、正月がどこかへいつてしまうでえ。ねーっ、ママ」

母さんがほえんでうなずいたのいいことに、もえぎが向かいのるりに目くばせする。

「るりちゃんはやさしいよ。あたし、しってるもん。でも、きなちゃんにはわからへんのよ。だから、ゆるしたって」

きなりのつりあがつた目が、今度はもえぎにうつる。

「チビのくせして、よけいなおせっかいすんな」

だまつて見ていた母さんが、とうとう口をはさんだ。

「今年も一年、にぎやかになりそうね、食事をはやくすませて、らくになさいな」

そういう母さんの足も、もうしびれていたらしく、ふすまの一点を **3** にらみつけては顔をしかめている。

みんなのお膳から、おせちはあつという間になくなり、そろって台所へ移動した。すわりなれたすにすわって、だれもがゆつたりとくつろいだ。その間に、母さんは針箱はりばこを持ってきて、きなりの袖をまにあわせにぬいあわせた。

父さんがふところから、ポチ袋おちぶくろのたばをテーブルの上にのせた。子どもたちの目が、いっせいに袋にすいついていく。

「これは西宮にしのみやのおばあちゃんから、これは長野のおじいちゃんから、これはマンションのおばあちゃんから、そして、これは父さんと母さんからです」

おじいちゃんたちのお年玉は、毎年暮れの三十日か三十一日に宅配便でとどけられる。

父さんはみんなに渡しおえると **4** と腰こしを浮かしはじめた。

「ジョンと散歩にいつてくるわ。修羅場しゅらばは **3** 苦手くでやからなあ。君たち、がんばれよ。かげながら応援してるからな」

お年玉をくばったあと、父さんがジョンと散歩にでかけるのも、いつものことだった。

「さて、みなさん」

母さんがきります。こういうときの母さんの言葉はばりばりの関東弁だ。

「今年の **B** 税金はどうしましょう。去年は四十パーセント、その前の年は五十パーセントでした。皆さんも大きくなってなにかと物いりでしょうから、今年は大サービスで三十パーセントにしようかとも考えていますが、いかがでしょうか」

C にこつと笑つたるりのひざを、きなりがそつとたたいた。

「みせかけにだまされたら、あかん」

あかねはだまつて考えている。なんとかやめさせたいけれど、方法が見つからないのだ。

もえぎひとりが退屈たいくつで、足をバタバタふつてはスリッパを床にころがしたり、たもとにみかんをいれてふりまわしたりしている。

「ママあ、もえぎ、お年玉、みんなママにあげる。だから、外へいつてもいいでしょう？」

D るりがすつと立ちあがり、もえぎのすきなクッキーやらポテトチップやらを、きれいなナフキンの上にならべる。

「もえぎ、これは大事な話しあいやねん。あんたもここにいなさい」

もえぎのおかしをつまむ音だけが、部屋にひびいていた。

二女のきなりが母さんを見つめる。

「税金のこと、もういっぺん考えなおしてもいいんやないの。そんなの、この家だけやわ」

「あらあ、税金の必要性を、またはじめから説明しないといけないかしら」

「税金とはそもそも国民の義務でして……」

「もうええよ」

きなりがうんざりした声をあげた。

「あかねちゃん、税金のことはあきらめようよ。今年はね……あたし、二十パーセントならいいと、きなり。」

「そんなら、あたしは十パーセントにするわ」

あかねがなげやりにいう。

るりだけ、なにもいわないで、じつとテーブルの端はしをにらんでいる。母さんがるりに目をとめた。

「あなたも自分の意見をおっしゃいな」

るりはだれをも見ないで、まっすぐに顔をあげると、

「税金はしかたない、と思うように育てられた自分が、かわいそうやわ」

だれにもなくいった。

「まるで、わたしがわるものみたいじゃないの」

E 母さんが乱れてもいない袴はかまもとをしきりになおしている。しかし、母さんの気持ちは変わらない。結局、今年の税率は二十五パーセントということ、話がおちついた。

「ママ、よかったね。お年玉、うれしい？」

もえぎの問いにはこたえないで、母さんがいそいそとでかける用意をはじめた。

「ママ、はやくはやく。外そと」

もえぎだけがひとりではしゃいでいた。

〔語注〕

- ※ぶしつけなやつちゃ……………行儀が悪い子のこと。
- ※ジョン……………飼っている犬の名前。
- ※あかんやろ……………だめでしょう。
- ※そこつもん……………そそつかしい人のこと。
- ※いずまいを正した……………様子をあらためた。
- ※ありがとう、ちゃうの？……………ありがとう、ではないの？
- ※アンサンブル……………同じ布で作った一組の衣服。

問一

①元旦

②カミフウセン

③苦手

の漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直しなさい。

問二

1

4

にあてはまる言葉として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか用いないものとします。

ア　ぐいっと　　イ　しぶしぶ　　ウ　こそこそ　　エ　そわそわ　　オ　じっと

問三

A　母さんの声はちよつとがっている。とありますが、「とがっている」とは「母さん」のどのような気持ちを表現したのですか。

最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　にぎやかな「きなり」にぼうぜんとしている。

イ　ふきげんな「きなり」におそれをなしている。

ウ　落ち着きのない「きなり」におこっている。

エ　おこっている「きなり」にとまどっている。

オ　おさない「きなり」にびっくりしている。

問四

B　税金　とありますが、「柏木家」での「税金」はどのような決まりになっていますか。わかりやすく答えなさい。

問五

C　にこつと笑ったりのひざを、きなりがそつとたたいた。とありますが、なぜ「きなり」は「るり」のひざをたたいたのですか。説明しなさい。

問六

D　るりがすつと立ちあがり、もえぎのすきなクッキーやらポテトチップやらを、きれいなナフキンの上にならべる。とありますが、なぜ「るり」は「もえぎ」のすきなクッキーやらポテトチップやらを、きれいなナフキンの上にならべたのですか。説明しなさい。

問七

E 母さんが乱れてもない衿もとをしきりになおしている。を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

とありますが、この時の「母さん」の気持ちとして最もふさわしいもの

ア 子供たちの意見があわないことにいらだっている。

イ 一方的に自分を責める子供たちに腹をたてている。

ウ すぐにあきらめてしまう子供たちにいやげがさしている。

エ 自分がしようとすることにうしろめたさを感じている。

オ この話を早く終わらせて出かけたいと思っている。

問八

四姉妹についての説明としてふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「あかね」は行儀がよく、姉としての自覚を持っている女の子。

イ 「きなり」は一見乱暴に見えるが、優しく思慮深い女の子。

ウ 「るり」は無口で考えの浅いところはあるが、気配りのできる女の子。

エ 「もえぎ」は明るくむじゃきで、姉たちに関心がない女の子。

得 点

採点欄
解答を記入
しないで下さい

[illegible]